

## 英語における「補語」の段階性 —学校文法における補語の扱いについて—\*

山岡 洋

### キーワード

使役動詞, 指数, 段階的, 知覚動詞, 定義, 文型, 補語, 補部

### はじめに

本稿は、日本の英語教育において文型を語る上では必須要素のひとつである「補語 (complement)」という範疇について、その問題点を指摘した上で、その本質的な姿を明らかにすることを目的とする。結論としては、補語というものは、補語か補語でないかという明確な線引きをすることは難しく、純粋に補語らしい補語から補語として扱うには問題がある補語まで段階的に存在することを、「補語指数 (complement index)」という概念を新たに導入して明らかにする。

これまでの学校文法 (school grammar)<sup>(1)</sup> では、補語という範疇の定義を明らかにすることなしに、その存在を当然のこととしてきた。ところが、実際にはその定義は非常に不明確であり、時には補語として扱うべきではないものまでをも補語として扱ってきたのが実情である。本稿では、このような補語の扱いについて問題点を指摘した上で、本来的に純然たる補語とはどのようなものであるか、一方で何らかの意味で補語としての純度が低いものとはどのようなものであるかを明らかにしていく。最終的には「補語指数」として、純然たる補語から全く補語でないものまでを、何種類かの指数を設けて数値化してその度合いを測る。

第1章では、従来「補語」として扱われてきたものがどのようなものであるかを概観する。第2章では、その従来の定義では問題となるような補語の扱いを指摘していき、第3章では、その問題点を元に、本質的な補語とはどのようなもので、それはどのような基準に基づいているのかを考えていく。第4章では、これまで補語として扱われてきた要素が、実際にはどの程度補語らしく、どの程度補語らしくないかを、第3章で定めた基準に基づいて数値化して比較していく。

### 1. 補語の定義

本章では、これまで「補語」という範疇がどのように定義され、具体的にどのような要素が補語として扱われてきたかについて概観する。

まず、補語の定義として、学校文法では次のような説明をしている (以下、引用文や例文における下線やイタリック体は山岡によるものである)。

(1.1) a. 動詞の後で主語と目的語について説明する語句

(cf. 『Forest<sup>6</sup>』 :39, 41, 『ロイヤル<sup>2</sup>』 :28, 30)

b. 主語や目的語とイコールの関係になる語句 (cf. 金谷 2002:81, 吉田 2003:35,40)

これらの定義から明らかなことは、学校文法においては補語というものを意味的な範疇として定義しているということである<sup>(2)</sup>。また、(1.1a)は補語を他との比較ではなく絶対的に定義しているが、(1.1b)は、特に目的語との違いを意識した定義で、この定義に対して、目的語は「主語や目的語とイコールの関係にならないもの」と定義される。

次に、Quirk et al. (1985), Huddleston and Pullum (2002)に代表されるいわゆる「伝統文法 (traditional grammar)」の枠組みでは、補語 (complement) は次のように定義される。

(1.2) a. ... the subject complement characterizes the subject. . . , whereas. . . the object complement characterizes the direct object. . .

(Greenbaum and Quirk 1990: 206)

b. . . . , it (i.e. a predicative complement) denotes a property that is predicated of the person referred to. . . .

(Huddleston and Pullum 2002: 217)

こちら第一義的な定義では、意味論的な定義を与えているが、学校文法という教育の場での定義とは異なり、厳密には様々な角度から定義されている。Quirk et al. (1985:728-29)では、目的語との違いも含めて、補語を次のように定義している。

(1.3) a. 形式：原則として、名詞句か形容詞句で、時として名詞節のこともある。

b. 位置：主格補語は原則として主語と述語動詞に後続し、目的格補語は原則として直接目的語に後続する。

c. 統語的機能：

(i) 補語が名詞句の場合、主格補語であれば主語と、目的格補語であれば直接目的語と、数の一致をする。

(ii) 主格補語が再帰代名詞の場合、主語と人称・数・性で一致する。

(iii) 補語は受動態の主語にはなれない。

(iv) 補語は疑問詞にすることはできるが、その方法は一様ではない。

(v) 主格補語が代名詞の場合、目的格よりも主格の方が形式的な表現になる。

d. 意味的特性：補語は、典型的にはそれが関連している指示対象を同定したり、特徴付けたりするものである。

このように、単に補語と言っても、様々な側面を持っているのが実情で、上の定義に基づき、具体的には次のような要素が補語と認められている。なお、S, V, O, Cの表記は、通常は下線部の下に表記されるが、ここでは紙幅の関係で下線の後に下付文字で表記する。

(1.4) a. Robert s is becoming v quite mature c. [主格補語・形容詞句]

b. Benjamin s is becoming v a conscientious student c. [主格補語・名詞句]

c. Doris s considers v Robert o quite mature c. [目的格補語・形容詞句]

- d. His parents <sub>s</sub> consider <sub>v</sub> Benjamin <sub>o</sub> a conscientious student <sub>c</sub>.  
 [目的格補語・名詞句] (以上, Greenbaum and Quirk 1990: 206)
- e. The point <sub>s</sub> is <sub>v</sub> you shouldn't have to wait so long to see a doctor <sub>c</sub>.  
 [主格補語・名詞節] (OALD<sup>8</sup>: s.v. *point*)

このように、一般に補語の例として挙げられるような要素については、特に問題点は見当たらないが、実際にはいくつかの重大な問題を孕んでいる。次章では、この補語の扱いに関する問題点を指摘していく。

## 2. 補語の問題点

- (2.1) a. I'm from Ohio. <sup>(3)</sup> (江川 1991:133)  
 b. I saw John entering the building. (安藤 2008:98)  
 c. She made him a good wife. (Huddleston and Pullum 2002:256)  
 d. She entered the room angry. (Dixon 2005:53)

(2.1) に挙げた各例文の下線部は、少なくとも補語を「説明する」とか「イコールの関係である」と定義している学校文法の中では、補語としての扱いを受けるべきものである。しかし、これらは補語としての扱いを受けるには、それぞれ重大な問題を抱えている。

まず、(2.1a) は from Ohio が副詞句であるところに問題がある。副詞句である証拠に、この句は I come from Ohio. で言い換えられ、この場合の from Ohio は補語としての扱いは受けず、副詞句として扱われる。究極的には、副詞を補語として扱うべきかどうかという問題になるが、江川 (1991:194) では、Close (1981: 26) からの引用で、次の用例を挙げて、副詞は補語になれるとしている。

- (2.2) a. The concert was { a success. [名詞]  
 b. very good. [形容詞]  
 c. in the open air. [副詞句]  
 d. yesterday. [副詞]

この比較から分かることは、in the open air も yesterday も、名詞や形容詞同様に文の必須要素であるということである。しかし、文の必須要素であることがすなわち補語であるということにはならない。補語という点で、副詞を名詞や形容詞と同列に扱うべきではない証拠として、次のように、be 動詞を他のコピュラに入れ換えると容認度に差が出てくる <sup>(4) (5)</sup>。

- (2.3) a. The concert seemed { a success.  
 b. very good.  
 c. \*in the open air.  
 d. \*yesterday.

このように、副詞語句を純粋な補語として扱うことには問題がある <sup>(6)</sup>。

2つ目として、(2.1b) の知覚動詞構文における目的語名詞句と現在分詞の関係について、安藤 (2008:98) は、「『主述関係』が見られるということで、諸家の意見は一致している。その意

味で、これらの構造はおしなべてSVOC型であると言ってさしつかえない。」と述べている。しかし、問題は主述関係の述部の部分を目的格補語と捉えている点にある。sawの補部となっているJohn entering the buildingの部分、単文の主部+述部に置き換えると次のようになる。

- (2.4) a. John is entering the building.  
b. John s is entering v the building o.  
c. \*John s is v entering the building c.  
d. \*John s looks v entering the building c.

(2.4a)を分析する時には、(2.4b)のようにSVOとして扱い、(2.4c)のようにSVCとしては扱わない。これは、このような場合のisが助動詞であるからで、当然、(2.4d)のように助動詞beを他のコピュラ本動詞に置き換えた場合に非文になることから明らかで、このような意味でSVOCの目的語と補語の関係を、「主述関係」と規定することには問題がある。

3つ目として、(2.1c)については、本来直前の目的語に関連しているはずの下線部a good wifeが、主語であるsheに関連しているところに問題がある。この構文は学校文法ではあまり扱われないが、扱われる場合にはSVOCの例外的なパターンとして扱われる。(『ロイヤル<sup>2)</sup> : 30)

4つ目の(2.1d)については、下線部のangryが必須要素でないところに問題がある。通常、補語というのはS, V, Oとともに「文の要素」と呼ばれており、すなわち文にとっての必須要素ということになっている。(2.1d)はSVOCのパターンの例であるが、これ以外にSVCやSVMCのパターンでもこのような随意的補語の現象は見られる。

- (2.5) a. During the night M the wind s blew v cold c. (江川 1991:95)  
b. He s returned v to his land M a different man c. (『ロイヤル<sup>2)</sup> :31)

以上のように、(2.3)で見た主格補語の場合であっても、(2.4)で見た目的格補語の場合であっても、その基準は明確ではなく、補語とみなされている要素の中には少なからぬ問題を含んでいるものがあることを見た。次章では、ある要素はどのような基準で補語と見なされるのかについて考察していく。

### 3. 補語の条件

前章では補語として扱われている要素に関する様々な問題点を明らかにしたが、本章では、その問題点を元に補語として扱うための条件を考察し、さらにはそれぞれの条件の厳しさについて考えていく。

まず、補語であるための条件については、第1章の(1.3)で挙げたQuirk et al. (1985)の定義が参考になる。(1.3)は大まかに、形式・位置・統語的機能・意味的特性に分けて補語を定義していたが、これを次のように捉え直してみる。

- (3.1) a. 品詞：形容詞か名詞である。  
b. 位置：  
(i) 述語動詞に後続する。

(ii) 関連する名詞句（補語として記述の対象となる名詞句）は、最も近い名詞句である。

- c. 統語的機能：原則として関連する名詞句と性・数で一致し<sup>(7)</sup>、述語動詞にとって不可欠な要素である。
- d. 意味的特性：関連する名詞句と be 動詞などのコピュラで連結することが可能で、関連する名詞句の属性・性質や状態を説明する。

(3.1a) に関して、(1.3a) では名詞節も含まれていたが、品詞という観点で捉え直せば、形容詞か名詞かのどちらかでまとめることができるため、(3.1a) では形容詞と名詞にまとめた。(3.1b) は、補語の位置を、述語動詞とそれに関連する名詞句との関係で捉え直した。(i) は、主格補語であれ目的格補語であれ、語順としては述語動詞に後続することを明確にした。一方、(ii) は、(2.1c) のように目的格補語の位置に主格補語が現れる特殊な例を想定して、本来補語というものはそれに先行する最も近い名詞句と関連をもつものであるということを規定した。(1.3c) では、一致 (agreement) の問題や受動化、疑問詞、格の問題が規定されていたが、これらに当てはまらずに補語として認められるような場合がないため、(2.1d) のように随意的要素が補語になるような場合を想定して、新たな統語的機能として、補語というものは典型的には必須要素であることを明記した。(3.1d) の意味的特性は、(2.3) で示したように、コピュラによる連結が可能である場合にのみ、関連する名詞句の同定や特徴付けがなされると規定することにより、意味的制約をより客観性の高いものにした。

以上が、(1.3) に基づいて (3.1) を設定した経緯であるが、(3.1a-d) がそれぞれどの程度必要度の高い条件なのかを検証する必要がある。そこで、条件の必要度を計る尺度として、必要条件・十分条件・必要十分条件という概念を援用する。

- (3.2) a. 条件文 A ならば B が真であるとき、A を B の十分条件という。
- b. 条件文 A ならば B が真であるとき、B を A の必要条件という。
- c. A と B が同値ならば、A は B の、そして同時に B は A の必要十分条件であるという。(石谷 1977:87-88)

(3.1) の各条件は、補語であるための条件であるから、必然的にすべて (3.2b) には当てはまり、したがって必要条件ということになる。となると、あとは各条件が十分条件にもなるかどうか、すなわち必要十分条件となっているかどうかの問題であるので、以下では (3.1) の各条件が十分条件になっているかどうかを検証していく。

まず、(3.1a) について、形容詞か名詞であれば必ず補語かということ、必ずしもそういうことはなく、名詞であれば目的語や主語の可能性があり、また形容詞の場合であれば限定用法の可能性もあるために、これは十分条件にはなり得ない。したがって、(3.1a) は単なる必要条件ということになる。次に、(3.1b) の (i) について、述語動詞に後続すればすべて補語かということ、必ずしもそういうことはなく、動詞に後続する要素は目的語であることもあるし、修飾語句のこともあるため、(i) は必要条件ということになる。一方、(ii) に関しては、最も近い名詞句を同定したり特徴付けたりすればこれは必ず補語ということになるため、(ii) は必要十分条件と

いうことになる。(3.1c)の述語動詞にとって不可欠な要素であるかどうかについては、補語でなくとも、目的語や修飾語句が述語動詞の必須要素になることもあるので、これは単なる必要条件ということになる。最後に、(3.1d)の意味的特性については、コンピュータで連結することが可能であれば、すべて補語ということになるので、これは必要十分条件ということになる。これらをまとめると次のようになる。

- (3.3) a. 品詞：形容詞か名詞である。 [必要条件]
- b. 位置：
  - (i) 述語動詞に後続する。 [必要条件]
  - (ii) 関連する名詞句（補語として記述の対象となる名詞句）は、最も近い名詞句である。 [必要十分条件]
- c. 統語的機能：述語動詞にとって不可欠な要素である。 [必要条件]
- d. 意味的特性：関連する名詞句とコンピュータで連結することが可能である。 [必要十分条件]

さらに、(3.3a)の中には形容詞と名詞が含まれているが、Huddleston and Pullum (2002: 252)によれば、補語として典型的な品詞は形容詞である。（‘predicative complement’は本稿での補語を指す。）

- (3.4) The central type of predicative complement has the form of an AdjP, . . . , or else of an NP used non-referentially, . . .

したがって、補語らしさという点では、名詞であるよりも形容詞である方が補語らしいということになる。

そして、(3.3a-d)の条件を、統語レベルと意味レベルに大別すると、(3.3a-c)はすべて統語レベルの条件としてまとめることができ、(3.3d)だけが意味レベルの条件ということになる。

ここで、補語として認可すべき条件を、「補語指数」という数値で表してみる。まず、単なる必要条件については指数を1とする。そして必要条件の中でも補語らしさという点では形容詞よりも劣る名詞の場合には、その指数を0.5とする。そして、必要十分条件についてはその指数を2とし、指数の多いものほどより純粋な補語になるということになる。以上の点をまとめると次の表1のようになる。

表1. 補語の条件と補語指数

レベル	内容	条件	補語指数
統語	品詞	形容詞である	1
		名詞である	0.5
	位置	述語動詞に後続する	1
		最も近い名詞句と関連する	2
	必要度	述語動詞に不可欠な要素である	1
意味	意味関係	関連する名詞句とコンピュータで連結できる	2

次章では、本章で設定した補語指数を実際の例に当てはめて、補語らしさを数値で比較してみる。

#### 4. 具体的検証

本章では、これまでに見てきた以下の文に関して、具体的に補語指数を計り、補語としての扱いの違いを明確に示す。なお、条件にあてはまらない場合にはその指数はゼロとなる（イタリックは関連する名詞句を表す）。

- (4.1) a. *Robert* is becoming quite mature. (= (1.4a))  
 b. *Benjamin* is becoming a conscientious student. (= (1.4b))  
 c. Doris considers *Robert* quite mature. (= (1.4c))  
 d. His parents consider *Benjamin* a conscientious student. (= (1.4d))  
 e. I'm from Ohio. (= (2.1a))  
 f. I saw *John* entering the building. (= (2.1b))  
 g. She made *him* a good wife. (= (2.1c))  
 h. *She* entered the room angry. (= (2.1d))

表2. 各例文に関する補語指数

例文	品詞	位置		必要度	意味関係	指数合計
		述語動詞	関連名詞句			
(4.1a)	1	1	2	1	2	7
(4.1b)	0.5	1	2	1	2	6.5
(4.1c)	1	1	2	1	2	7
(4.1d)	0.5	1	2	1	2	6.5
(4.1e)	0	1	2	1	0	4
(4.1f)	0	1	2	1	0	4
(4.1g)	0.5	1	0	1	2	4.5
(4.1h)	1	1	0	0	2	4

(4.1a) から (4.1d) までは、品詞が形容詞か名詞かの違いのみが原因で指数の差が出ているが、事実上純粋な補語と言えるものである。(4.1e) から (4.1h) までが、「不純物」の混じった補語と言えるが、(4.1e) の場合には、品詞が副詞で関連名詞句とコピュラで連結することができないために指数が4まで下がっており、補語として扱うにはかなり問題がある結果となっている。(4.1f) は、知覚動詞構文の非定形動詞部分で、関連名詞句である直前の目的語とは主述関係で結ばれているが、やはり純粋な補語とは違ってコピュラでの連結が不可能になっている分、指数が下がっている。さらに、コピュラでの連結が不可能であることから、非定形動詞部分は形容詞として機能しているのではなく、動詞として機能していると見るべきで、そのような理由から品詞の指数は0となる。(4.1g) は、目的格補語の位置に主格補語が生起している例であるが、ここでは関連名詞句との距離が問題となり、補語と関連名詞句（この場合は主節の主語）との間に他の名詞句（この場合は目的語）が介在しているために、その指数がゼロとなっている。(4.1h) は、問題の要素が随意的要素である点と、当該の補語と関連名詞句（この場合は主語）が離れていて間に他の名詞句（この場合は目的語）が介在しているために、その2点について指数がゼロになっていて、結果として(4.1e) の同程度に補語として扱うには問題がある要素ということになっている。

それでは、「補語」と呼ぶべき要素は、補語指数に基づけば何点以上なのであろうか。もちろんそれは基準の設け方によって変わってくるもので、(4.1f) のような知覚動詞構文をS+V+O+Cと捉え、(4.1e) の副詞語句や(4.1h) の準補語まで補語として認めるのであれば、補語指数4以上の要素を補語と認めるべきであるということになる。ただ、本稿の主張としては、基本的に表1に挙げた諸条件のすべてを満たしている場合を補語と扱うべきであるとする。結果として、補語指数が6.5以上の場合のみを純粋な補語と認めるということになるが、理由としては以下のものが挙げられる。









(4.2) a. 形容詞か名詞かの違いは、動詞によってその親和性の違いが出てくるだけで、文



全体の意味がほぼ等価であるような状況下では、一方が補語として認められれば、他方も補語として認められる。具体的には、He is kind. と He is a kind guy. のようなケースである。

- b. 副詞語句を補語として扱う点については、(2.1) に関連して述べたように、状況によっては同じ意味を表す副詞句が補語として扱われたり、修飾語句として扱われたりするような矛盾が生じる。
- c. 知覚動詞構文・使役動詞構文における不定詞句・分詞句の部分については、(2.4) でも見たように、主格補語との一貫性を保てなくなる。
- d. 目的格補語位置に生起する主格補語については、make などごく一部の動詞に限られ、頻度が極めて低い。
- e. 随意的補語については、「随意的」という点で文に不可欠である他の文の要素 S, V, O との一貫性が保てなくなる。

以上のような理由から、本稿では、補語指数7およびそれに次ぐ6.5である(4.1a-d)を純粋な補語と定義し、それに準ずる補語指数4～4.5の(4.1e-h)の要素を「擬似補語(quasi-complement)」と呼ぶことにする。このように、補語指数に基づいて、上掲の(4.1)をその指数が高い順に補語と擬似補語に分類すると、次の(4.3)のようになる。

- (4.3) a. *Robert is becoming quite mature.* (= (4.1a))  
補語指数7：補語 
- b. *Doris considers Robert quite mature.* (= (4.1c))  
補語指数7：補語 
- c. *Benjamin is becoming a conscientious student.* (= (4.1b))  
補語指数6.5：補語 
- d. *His parents consider Benjamin a conscientious student.* (= (4.1d))  
補語指数6.5：補語 
- e. *She made him a good wife.* (= (4.1g))  
補語指数4.5：擬似補語 
- f. *I'm from Ohio.* (= (4.1e))  
補語指数4：擬似補語 
- g. *I saw John entering the building.* (= (4.1f))  
補語指数4：擬似補語 
- h. *She entered the room angry.* (= (4.1h))  
補語指数4：擬似補語 

各例文の下に記してあるのが補語指数と補語か擬似補語かの区別である。例文の右側の四角はどれだけ純然たる補語であるかを色で示したものである。(4.3a, b)は最も補語指数が高く純然たる補語と認められる要素で、四角は完全な黒になっている。(4.3c, d)は、品詞が形容詞ではなく名詞であるという点で、やや典型的な補語とは言いがたいが、(4.2a)で述べたような理由

からそれでも純然たる補語に分類される。それに応じて、四角はやや白い点の混じった黒になっている。(4.3e)になると、補語指数が一気に6.5から4.5に下がり、ここからは純然たる補語とは認められず、擬似補語になる。それに伴い、右側の四角もさらに白い点が多く混じった黒で表示してある。補語指数が4と最も低い(4.3g-h)も擬似補語に分類され、四角は白い点がさらに多くなって黒との比率が半々程度のもので表示してある。

このように、一般的に補語と認められている要素にも、問題なく補語と認められるものから補語とは認めがたいものまであり、それらが段階的に分布していることが補語指数の導入によって明らかになる。

## おわりに

これまで見てきたように、本稿では「補語指数」を導入することにより、より純粋に補語として扱うべき要素から、より問題の多い要素まで、段階的に推移していることを明らかにしてきた。ただ、本稿で設定した項目や、それぞれの項目に割り振った補語指数の妥当性については今後更なる検討が必要と思われる。また、補語としばしば対比される目的語との関連性を視野に入れた客観的指数の設定も必要になってくるであろう。さらには、今回は便宜上統語的レベルと意味的レベルに大別したが、統語論と意味論の相関関係まで視野に入れた上でこれらのレベル同士の相対的強さについての検証も必要であろう。また、一方で、この段階的に推移する現象というのは、言語全般に見られる現象であり、それを客観的に明示することは補語以外の現象についても今後必要となってくるであろう。

最後に、この指数自体は客観的な補語の扱いに関する程度の違いを示すことができたとしても、今度はそれをいかに教育の場に生かしていくかという方法論は、別の問題として十分に検討されなければならないと思われる。しばしば問題となる、理論と実践の橋渡しは、今後ますます様々な状況で必要となってくるであろう。

## 注

\* 本稿は、山岡(2010)および2010年8月8日に関西学院大学大阪梅田キャンパスで行われた第6回英語語法文法学会主催「英語語法文法セミナー」における研究発表に、その後の研究成果を踏まえた上で、修正を加えたものである。山岡(2010)については小池一夫先生を始め、「英語語法文法セミナー」では八木克正先生、安井泉先生を始め、それぞれ多くの方から貴重なコメントをいただいたので、ここに感謝の意を表したい。

- (1) ここでの「学校文法」とは、日本の中学校および高等学校の英語の授業で扱われている英文法を指すものとする。したがって、必ずしも日本以外の学校で教えられている英文法を指すものではない。
- (2) 日本の中学校・高等学校における英語教育は、知的に成長過程にある中高生のために「理解しやすさ」を優先して、様々な文法範疇を意味的に説明する傾向がある。例えば、本来は統語的範疇を基準として分類されている品詞について、「名詞はものの名前を表す」とか、「動詞は動作を表す」などもその例として挙げられる。本来的には、これらの説明に加え、「名詞は主語になれる語である」とか「動詞は述語になれる語である」という品詞本来の働きにも必ず触れる必要がある。

- (3) 江川 (1991) では、本論で触れたように、I'm from Ohio. の from Ohio を補語と認定しているが、この部分を義務的修飾部と捉えることもある。しかし、I'm from Ohio. の from Ohio が修飾部で、I'm an Ohioan. (オハイオ州の人間です) の an Ohioan が補語であるとする、今の学校文法の枠組みではその区別の明確な根拠を学習者に示すことができない。ここでの from Ohio は明らかに主語に関する説明をしている部分であることから、学校文法の枠組みでは補語と扱われるべきものとして提示した。
- (4) 本稿における英文の容認度判断は、アメリカ人4名、カナダ人1名によるものである。
- (5) 一言に「コピュラ」と言っても、統語的には連結的な働きをするという点でその機能を共有しているが、意味的には必ずしも画一的ではない。例えば、be 動詞は意味的には無色透明と言えるが、seem, appear, look, feel, sound の類はいわゆる「知覚動詞」的に「～に見える」「思われる」という意味になり、remain, keep, lie, stay の類は状態の継続を意味する「～のままである」という意味になり、become, get, grow, turn, make などは変化の意味を表し、「～になる」という意味になる。本来的にはこのような語彙論的な相違も十分に加味して容認可能性の違いを検討すべきであるが、本稿では紙幅に限りがあるため、seem に限定して考察を進めていく。
- (6) 原則として、副詞は補語として扱うには問題があるが、次に挙げる従来副詞である down, over, up などのいわゆる不変化詞 (particle) は、現在では形容詞化しており、純粋な補語として扱われるべき性質を持っている。
- i) a. Warplanes that have landed there will be kept until the war is over.  
(COBUILD<sup>5</sup>: s.v. *over* (*adj.*))
- b. Everyone was talking in whispers, and I could tell something was up (= something unusual was happening).  
(CALD: s.v. *up* (*adj.*))
- c. Your time is up — it's someone else's turn on the training equipment now.  
(CALD: s.v. *up* (*adj.*))
- d. I found Mary down (= ill in bed with influenza). (安井 1996: 33)
- e. “Is Mr. Smith in?” “No, he is out.” (安井 1996: 34)
- まず、これらの語が補語として扱われるべき理由のひとつとして、ここに挙げた例文の引用元である COBUILD<sup>5</sup> や CALD では、これらの語を形容詞として掲載している (ただし、同じイギリス系の辞書でも、LDOCE<sup>5</sup> や OALD<sup>8</sup> はこれらの語をまだ副詞として掲載している)。さらに、これらを補語として扱うべき他の証拠として、これらの副詞の場合には、be 動詞以外のコピュラの使用が可能となる。
- ii) a. The war seems over.  
b. Something seems up.  
c. Your time seems up.
- (7) 「原則として」というのは、以下のような場合には必ずしも関連する名詞と補語が、数の点で一致しないこともあるからである。
- i) a. Her only hope for the future is her children.  
b. Our principal crop is potatoes.  
c. The stars were our only guide. (『ロイヤル<sup>2</sup>』:726)

## 引用文献

- 安藤貞雄 (2008) 『英語の文型 ―文型がわかれば、英語がわかる―』 開拓社言語・文化選書 5, 開拓社.
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (2003) Cambridge: CUP. [CALD]
- Close, Reginald Arthur (1981) *English as a Foreign Language: Its Constant Grammatical Problems*, 3rd ed., London: George Allen& Unwin.
- Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary* (2006) 5th ed., Glasgow: HarperCollins. [COBUILD<sup>5</sup>]
- Dixon, R. M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*, Oxford: Oxford UP.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』改訂三版, 金子書房.
- Greenbaum, Sidney and Randolph Quirk (1990) *A Student's Grammar of the English Language*, London: Longman.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: CUP.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*, Cambridge: CUP.
- 石谷茂 (1977) 『記号論理学とその応用』大阪教育図書.
- 金谷憲 (2002) 『シグマベスト くわしい英文法 中学1～3年』文英堂.
- Longman Dictionary of Contemporary English* (2009) 5th ed., London: Longman. [LDOCE<sup>5</sup>]
- 塙タカユキ・川崎芳人・久保田廣美・高田有現・高橋克美・土屋満明・Guy Fisher・山田光・鈴木希明 (2010) 『総合英語 Forest (フォレスト)』第6版, 桐原. [『Forest6』]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2010) 8th ed., Oxford: OUP. [OALD<sup>8</sup>]
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.
- 吉田正俊 (2003) 『シグマベスト 理解しやすい英文法』文英堂.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘・マークピーターセン (2000) 『ロイヤル英文法』改訂新版, 旺文社. [『ロイヤル<sup>2</sup>』]
- 山岡洋 (2010) 「英語の文型に関する一考察」『英語学・英語教育研究』(日本英語教育英学会), 13 (27), 1-31.